

[テーマ企画：特集 アスペクト]
まえがき

風間 伸次郎

1. 企画に至った経緯

『語学研究所論集』では、前回の「受動表現」に続き、今回は「アスペクト」という統一テーマを組んで、各言語におけるアスペクト表現をめぐる状況を報告していただくということになった。中澤、鈴木、風間が「世話役」となって、この3名で呼びかけ、寄稿のお願い、原稿集めなどを行うことになった。

まず、日本語による20ほどの例文からなるアンケートを作成し、これに答えていただくことによって、各言語のデータを収集することにした。アンケートの構成や意図については、次の2節で説明する。アンケート本体は本稿稿末に付録として添付したので参照されたい。

アンケートを御覧いただけるとわかるが、データの提供だけでなく、さらにその言語のアスペクトについて詳しく書いていただける場合には、特集の中にも含めるものの、同時にこれを独立した論文もしくは研究ノートとして位置づけることとした。

こうして3本の論文、6本の研究ノート、16の言語に関するアスペクト表現のデータが集まった（なおドイツ語とラトヴィア語に関しては論文と言語データが別個に得られたので、異なり言語数は23である）。これは外大にある26の専攻語のうちの16言語にリトアニア語、ラトヴィア語、ブルガリア語、ウクライナ語、キルギス語、ウズベク語、ナーナイ語、を加えたものとなっている。

問題点もあるだろうが、

(1)統一した例文（意味）に対する各言語の表現を知ることができる、

(2)狭い意味でのアスペクト表現のみならず、アスペクト的意味を示す諸形式や諸表現について、さまざまな言語における状況を知ることができる、

などの点では意義のある成果となったのではないかと考えている。ただ今回の特集では、筆者の時間や能力の問題から、類型論的な分析を示すまでには至らなかった。今後の第3回以降の企画特集ではこうした点を改善してゆきたいと考えている。

2. 広義の「アスペクト」と本特集のねらいについて

本特集の「アスペクト」のアンケートの文を見た方の中には、「これがアスペクトの

研究なのだろうか？」と感じた方も多いことと思われる。特に、伝統的にアスペクト研究の中心となってきたスラブ諸語のアスペクトに親しんできた方々にはそのような感じを強く持たれた方も多いだろう。本特集のアンケートがこのような形をとったのには、次のような2つの理由による。

- ・通言語的な対照を可能にするため、「アスペクト」をできる限り広く定義したため。
- ・アスペクトと密接に関連している他の文法的カテゴリー（ヴォイスなど）との相関作用についても注目しようとしたため。

こうした姿勢は、後述するように、コムリー(1988)に倣ったものである。

山田(1988)はコムリー(1988)の「訳者あとがき」であるが、そこには山田の考える(かなり広い)アスペクトの枠が簡潔にまとめられていて、きわめて有用である。そこで筆者の考えるアスペクトの枠を示すために、以下ではまず山田(1988)を引用し、しかるのちにそれに対する筆者の考えを述べることにする。

Comrie は、アスペクトとは特定の言語、ことにスラブ系の言語だけに結び付けられる狭い現象ではなく、あらゆる言語にある、人間の時間意識そのものに根ざした普遍的カテゴリーであると考え、はっきりとした形式で表わされる文法カテゴリーとしてのアスペクトは現象のごく一部にしかすぎないと考え、アスペクトとアクションズアルトの違いはなにかという点にはこだわらず、それらを大きくつつむ広い概念をアスペクトと規定している。人間に共通なアスペクト概念をあらゆるいろいろな表現を多種多様な言語からとりだしてみせて、その共通点を示そうとしている。また、アスペクト内部の仕組みだけでなく、それと密接に関連しているテンス、ムード、ヴォイスなど他の意味カテゴリーとの相関作用にも着目し、それを解明しようとしている。

ところで、アスペクトをスラブ語だけでなく、あらゆる言語に存在する普遍カテゴリーとすると、アスペクトを完結-非完結(pf-ipf)の対立のみに限る狭いアスペクト論は成立しなくなる。しかし、また、逆に、事象の時間的性質も、話者の視点も、事象の内部構成も複数生起の性質も十把ひとからげにして、しかも多くの言語にまたがって取り扱おうとすると、アスペクトの領域を限りなくあいまいにしてしまう危険性もある。この点の詳細についてはあらためてどこか他の場で発表したいと考えているが、ここではいちおう訳者の考えるアスペクトの枠と Comrie のアスペクトの対比だけをしておく。(中略)

アスペクトとして扱われるべきものには大別して次の四種があると考え。

- ① 話者の視点にかかわるもの：これは視点あるいは立場アスペクトと呼んでもよいも

のであり、pf-ipf 対立に代表される。事象（場面…situation）の生起時間の長短にかかわらず、ある事象の生起全体をそのそとがわに置かれた視点から把握するのが完結相、事象の内部に視点をおいて内側から観察するのが非完結相である。（中略）従来のスラブ語中心のアスペクトの研究はここが主であり、Comrie も pf-ipf 対立アスペクトの意味、対立が成立するための条件、その言語表現などについて詳しくのべている。

② 事象（場面）の時間的性質そのものにかかわるアスペクト：動詞の語彙的意味として現れるので動詞の分類の形で取り扱われることが多い。Vendler を始めとして、例えば、Kenny, Garey, Bull, Verkuyl, Heinamaki, Freed, Dowty, Mourelatos, Gabbay/Moravcsik などの分類はこの種の分類である。Vendler, Kenny のあとは、動詞のみがこの性質をあらわすのではなく、動詞に固有の意味と文中の他の要素によってあらわされると考えるのが一般的傾向となっている。分類の基準となる基本的な性質としては動的/静的、持続性/非持続性、点的/線的、限界性/非限界性、完結点の有無などがあげられる。この基本的性質の組合せをアスペクトと見なしているような例もあるが、Comrie はこれをアスペクトとはよばず、動詞の固有のアスペクト意味とよんでいる。

③ 事象の展開の局相をしめすアスペクト：Agrell の時代から Aktionsart という名称でよばれることが多かった。事象を開始、真中、終結のどの時点で取り上げるかを示すアスペクトである。Comrie はアスペクトのこの面については特にふれていない。

④ 事象の複数性にかかわるアスペクト（あるいは拡大された視野）にかかわるアスペクト：反復や習慣のような事象の複数生起に関するアスペクトである。Comrie における反復、習慣アスペクトがここに入る。

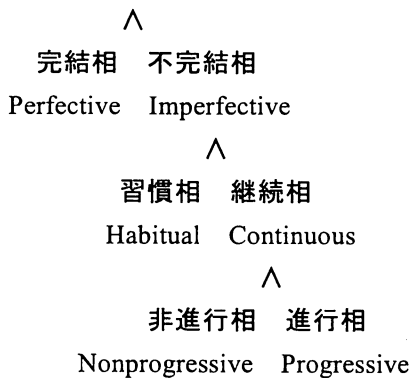
①-④のアスペクトは話者の立場、事象の性質、着目のしかたなど性質をことにしている。ふつうはそれぞれが単独に文中に現れるのではなく、例えば、視点と事象の性質の組合せ、視点と局相の組合せのように組み合わせとして表現される。

上記の①～④のうち、まず②は、Comrie のいうように別扱いにするのがよいと考える。文法的要素とは、語彙的要素と（連続体をなしつつも）機能的に対立するものであるとした場合、動詞の語彙的意味自体は語彙的要素であって、文法的要素ではないことになる。一般に、文全体のアスペクト的意味は、次のようにして実現すると考えられるだろう。すなわち、アスペクト的に固有の意味を持ったある動詞に、何らかの文法的操作（接辞や付属語の添加、重複、分析的な句表現の形成、など）が行われて、より大きな単位でのアスペクト的意味がまず実現し、さらに時の副詞などをはじめとする文中の他の要素が加わって最終的に文全体でのアスペクト的意味が実現する、と考えられる。この第一段階、すなわち語-句単位でのアスペクト的意味が成立する際の、

諸操作が“狭義の”文法としてのアスペクトであると考え、したがって②は、文法としてのアスペクトが作用するスタート地点ということができるだろう。もちろん個々の動詞のアスペクト的意味は、その動詞がとる接辞などのアスペクト的要素のとり方を決定するものであるし、文法的要素の出現の可否とそれが実現する機能に大きな影響を与えるものであることは確かである。しかしそれは文法としてのアスペクトそのものではないと考える。

次に、③・④と、①の間の関係を考えたい。①は、(時間の長短を問題にしない)視点に関わるものなので、③・④とは次元の違うもののようにも思われる。しかし①も時間軸の上での事象に対する見方であることには変わりなく、③・④と全く切り離されるものとは思われない。結論を先に言うと、③・④は①の「下位区分」として位置づけられるものと考えられる。

まず④と①の関係に関連して、Comrie (1988)は次のような表を示している。



これは、Comrie (1988)によれば「不完結相の、もっとも典型的な下位区分」であり、多くの言語は不完結性の全体をとらえたカテゴリーをもっているが、そのような言語の不完結性の領域は習慣性と継続性というふたつの概念に下位区分する必要がある、という印象を与えるという。

反復や習慣は、たしかに複数生起の事象であり、一つの事象の諸局面をとらえる③や、一つの事象を別の視点からみる①とは本質的に異なる点があるようにもみえる。しかし、実際の自然言語は無限に存在する事象に対応する無限個の文法要素を具えているわけではないので、限られた数の形式のそれぞれがいくつかの事象を表現する。Comrieの観察が正しければ、習慣は往々にして不完結相の中やその下位区分で処理される傾向があるということになる。したがって④を①の下位区分と考えたい。ただし

かし、主体や客体の数の区別にうるさい言語や、反復や習慣に対して一次的かつ屈折的な形式を用意している言語の存在も考えられる。④を別扱いする観点の重要性については、多くの言語での④の具体的な現われを観察する中で、さらに検討してゆく必要性があるだろう。

③に関しても同様で、ある事象の諸局面（局相）のうち、開始や終了は完結相の、真中は不完結相の下位区分として取り扱う言語も多いのではないかと思う（これはさらに多くの言語による検証を必要とする、むしろ上記の Comrie の観察のほうも、さらなる検証が必要であろう）。

誤解されるおそれが考えられるので、通言語的なアスペクトの枠において、「下位区分」という用語を用いる意図について若干補足しておきたい。上記の Comrie の表を例にして説明すれば、まず完結と非完結の対立が義務的に（すなわち屈折的・一次的に）表現され、習慣や継続が非義務的に（つまり派生的・二次的に）表現される言語があるだろう。このような言語の場合は「下位区分」、として容易に理解できよう。一方で、習慣と継続の対立が一次的なものに繰り上がって、完結と習慣と継続の3者が同じレベルで対立し、屈折的な文法カテゴリーを形成しているような言語も考えられるだろう。しかし、まず習慣と継続の対立が一次的にあって、継続が完結と非完結に分かれたりする言語は存在しないものと考えたい。諸言語におけるこのような状況があったとき、これらを総括する通言語的な枠組みとして上記のような下位区分を仮定するのである。

以上で、山田(1988)の①-④に関する検討を終える。

アスペクトについてこれを広く捉え、通言語的に観察・対照していくためには、さらに2つの問題を取りあげておきたいと考える。まず第一には、タクシスの観点が必要であると考え。すなわち、前後の節や前後の文の中におかれた動詞が、時間を止めてその中で次の動作を受け入れるようにするのか、それとも時間を進めて次々と別の動作に展開していくのか、という問題である。今回のアンケートはみな前後の文脈を持たない単文であるので、このような観点からの研究に何らかのデータを提供するようなものにはなっていない。

次に、超時間的な動作・行為、すなわち恒常的真理などの非アクチュアルな行為には、アスペクトが存在しない、そこではアスペクトは問題にならない、という考えがある。しかし筆者はこのような考え方に賛同しない。（スラブ諸語で伝統的に問題にされてきた）狭義のアスペクトはともかく、広義のアスペクトではこのような超時間的な動作・行為に対しても、何らかの文法的形態が生じるのであり、その要素は他のアスペクトの要素と無関係ではあり得ないと考えからである。今回のアンケートでも

そのような調査項目を設定し、データを収集した。

以上のように「広義の」アスペクトの枠を考えた上で、アンケートにとりあげた項目をみてゆくことにする。

3. アンケートについて

ここでも、まずは山田(1988)による①-④の分類に即して、説明をすすめてゆくことにする。しかるのちに、他の文法的カテゴリーとの相関について触れる。

まず②に関して、欧米では Vendler、日本語学では金田一をはじめとする動詞分類の研究が多く存在する。ただ今回の特集では、こうした面の調査は行っていない。諸言語のアスペクト的な動詞分類を対照できればおもしろいだろうが、それぞれの言語で、[あるアスペクトの形式]が、どんな動詞とは共起し、どんな動詞とは共起しないかをテストするにはたくさんの動詞についてテストを行わなければならない。どんな基準でどんな動詞を選ぶかも問題である。上記の山田(1988)の引用中にもあったように、動動的/静的、持続性/非持続性、点的/線的、限界性/非限界性、完結点の有無、といったさまざまな基準がある。現在日本語学では、主体動作客体変化、などのような、ヴォイス的な側面のからんだ分類基準もさかんに用いられている。さらに[あるアスペクトの形式]として何を選んでくるかも問題である。ロシア語における完結/非完結のように、一次的で生産性の最も高いアスペクトの対立がはっきりしている言語はよいが、そうでない言語もたくさんあるだろう。また一次的な対立が完結/非完結である保証もない。このように考えると②の対照は個々の言語における詳細な記述文法に基づいて進めるよりないと思われる。さらに、その方法でもなお危険がある。Aの言語でなされた動詞分類における(例えば)「結果動詞」というグループが、Bの言語の動詞分類でなされた「結果動詞」と一致するとは限らないだろう。同じ/似た意味の動詞がAの言語では「結果動詞」に入り、Bの言語では入らないということが起きるだろう。そのような出入りも含めて精密な対照を行ってはじめて②に関する対照は意味を持つてくるだろう。メタ言語によって名づけられたアスペクトの内実を、通言語的に普遍の意味を持つものと錯覚してはならないと考える。このようなわけで、②に関しては今回の特集では扱っていない。

①に関しては、アンケートの(1)~(4)、(9)~(10)が該当する。しかしスラブ諸語での詳細な研究の伝統から見れば、ほんのわずかな調査項目にしか映らないだろう。

他方、③・④に関しては、いくつかの事象に関して多彩な言語における例が集まった。具体的に見ると、まず③に関しては、(17) [開始]、(11) [継続/進行]、(18) [長時間の継続/進行]がある。④に関しては、(13) [習慣]、(15) [過去の(比較的長期

に亘る) 習慣] がある。さらに、③の諸局相には、開始・真中・終結だけでなく、(23) 開始直前 (いわゆる将然相)、(24) [未遂に終わった事態] などを入れてもよいと考える。

最後に、いわゆる恒常的真理など、具体的な時間から開放されて、始まりも終わりも明確でない事象が存在する。上述したように、これはひとまとまりの事象としてとらえることができないため、アスペクトを持たないとする研究もある。他方、それも一つの時間的な事象ととらえてアスペクトの一つとしてとらえる研究もあるだろう。今回の調査には、(14) [「似ている」などの状態性の述語]、(22) [恒常的な心理] がある。

次に、他のカテゴリーとの相関作用についてみる。まず、同じ時間に関する文法的カテゴリーであるテンスとの関連を考えないわけにはいかないだろう。歴史的にパーフェクトなど相対的な時間を示していた形式が、発話時を基準とする絶対的なテンスにその機能を移行させてきた例が多く報告されている。まず、(5) [近未来]、(7) [現在と切り離された過去]、(8) [過去の否定] がテンスとの関連を問題にした調査項目である。これとは逆に発話時の状態とそれ以前の事象を結び付けるもの、すなわちいわゆるパーフェクトもテンスとアスペクトの相関作用の上に考慮すべきものであると言えよう。日本語を調査の媒介言語として使用したため、(1)、(2)、(9)、(12)、(16)でのタ形やテイル形はパーフェクトの性質を示している。

さらに(26)、(27)、(28)はアスペクト自体からは若干離れるかもしれないが、時制の一致や相対テンスの有無を探ったものである。

ヴォイスとの関わりについては、(12) [行為の対象に残る結果状態の継続] がある。モダリティとの関わりに関するものとして、(21) [意志表現] がある。(6) [発見] は、証拠性 (evidentiality) との関わりからも問題にすべきものかもしれない。

4. 本特集で収集した言語とその系統

本特集でデータを収集した言語を語族別に見ると、英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語、ペルシア語、ウルドゥー語はインド・ヨーロッパ語族の言語、さらにロシア語、ポーランド語、ウクライナ語、ブルガリア語はインド・ヨーロッパ語族の中でも、これまでのアスペクト研究の中でもっとも重要な対象となってきたスラブ諸語である。リトアニア、ラトヴィアの両言語はバルト語派の言語であるが、スラブ諸語と系統的に近いと考えられており、今回の報告でも比較的複雑なアスペクト体系を示している。トルコ語、ウズベク語、キルギス語はチュルク諸語、モンゴル語はモンゴル諸語、ナーナイ語はツングース諸語に属する。朝鮮語の系統は不明とさ

れている。インドネシア語はオーストロネシア語族、中国語、ビルマ語はシナ・チベット語族、ラオ語はタイ・カダイ語族とされている。

5. アンケートの各項目の検討

以下では各言語から得られたデータに対して、アンケートの順序に沿って、筆者が興味深いと思った点や注意すべきであると思った点について簡単に触れる。言語間での類似と相違に関してもできる限り整理することを目指した。

- ・(1) [自動詞の完結相～パーフェクト]「～さん(固有名詞)は/あの人は もう来た。」
- (2) [自動詞のパーフェクト]「～さん(固有名詞)は/あの人は もう来ている。」

(1)は「来る」という動作が完了したことに注目した表現であるのに対して、(2)のほうは、さらに「現在もここにいる」ということを強く意識した表現(いわゆるパーフェクト)を意図した調査項目である。この違いを動詞において明確に示す言語は、ブルガリア語、ラトヴィア語、キルギス語、ウズベク語、モンゴル語、朝鮮語、ビルマ語である。これらの言語は完結相の他に、現在へのつながりを明確に示すパーフェクトの形式を持っている。その表示と、完結相との形の上での対立の仕方は言語によってさまざまである。まずキルギス語とウズベク語では、ともに屈折接辞であって、同じ位置で連合的に対立する。ウズベク語に関しては、「自分で目撃したかどうかが問われない」との記述があり、証拠性(evidentiality)との関わりがあることが注目される。ブルガリア語、ラトヴィア語では、完結相が語の上に総合的に表示されるのに対し、パーフェクトは be 動詞と過去分詞による分析的表現である。モンゴル語と朝鮮語では、パーフェクトの形式において、(継起的)副動詞(／連結語尾)に存在の補助動詞を続けるという分析的表現をとる。この点で両者(さらに日本語の西日本の諸方言)は似ているが、完結相のほうにモンゴル語では語幹拡張の非義務的な接辞(-čix)を伴っている点で異なっている。朝鮮語のほうではそれが不要であるのは、朝鮮語の完結相に用いられた形式が、もともとパーフェクト的な機能の形式であったことに起因するのかもしれない(この点では日本語と似ている)。モンゴル語の(2)において、「動作完結後さほど時間が経過していない」と記述されている点にも注意すべきであろう。なおトルコ語でも同様の形式が可能だが、その頻度は低いという。ビルマ語でも存在の補助動詞を用いるが、この言語ではこうした場合の動詞の接続に、特にそのための形式を用いないようだ(その点でモンゴル語などと異なっている)。

インドネシア語では、パーフェクトの意味の実現に、副詞が大きな役割を果たしている。特に sudah 「もう」一語のみで、パーフェクトの意味の問いかけや返答に使える。

る点の特異である。

ドイツ語、ポーランド語、トルコ語などでは、(2)に対して「ここにいる」のような表現を使うという。つまりは現在の状態の表現によって、それ以前に起きたパーフェクト的動作を含意させるわけである。

・(3) [完結相の否定] 「～さん（固有名詞）は／あの人は まだ来ていない。」

(4) [現在の否定] 「～さん（固有名詞）は／あの人は まだ来ない。」

(1)(2)の場合とは逆に、多くの言語が(3)と(4)に違った表現を用いる。したがって、まず同じ表現を用いる言語のほうをあげると、ロシア語、ウクライナ語、ウルドゥー語、ペルシャ語、インドネシア語、朝鮮語となる。系統的に比較的近いと言われているスラブ諸語とインド・イラン諸語が足並みを揃えている点がまず興味深い。これらの5言語は、肯定のほう((1)と(2))でも同じ表現であったことが注目される。ビルマ語も(3)と(4)の表現はほぼ同じようだが、(1)と(2)の表現は異なっている。

それ以外の多くの言語では、(3)は(1)の形式(現在完了形など)を否定した形になり、(4)では現在形を否定した形になっている(なお調査言語である日本語の構成に影響された面もある)。同じスラブ諸語でもブルガリア語はパーフェクトを持つために、ロシア語やウクライナ語と違い(3)と(4)を区別している。

他方、(3)がたんに(1)の動詞の形式を否定した形にはなっていない言語もある。例えばモンゴル語では独自の語尾、キルギス語では未完了副動詞の否定になっている。

興味深いのは中国語やラオ語で、これらの言語では(3)のような発生の否定と、(4)のような意志の否定を区別する。中国語では否定の形式にそもそも2種類(没 méi と不 bù) あるが、ラオ語では発生の否定のほうを、否定と dáy 「得る」という動詞の組み合わせによって示す。

ドイツ語やポーランド語では、肯定の場合と同様に、「ここにいない」という表現も用いられる。

今回集まったデータを見ていて、(4)の文の語用論的含意について考えさせられた。朝鮮語、モンゴル語、トルコ語、キルギス語のデータには、「来るべきなのに来ない(さらには、非難のニュアンス)」もしくはそれに類する語用論な意味(「呼んだのに来ない」など)が含意されるとの記述があった。ラトヴィア語では完結相を用いた場合に、「来る途中であるが、到着はしていない」という含意も記述されていた。

意志的な動作動詞の場合、単純な現在の否定形は、1人称であれば主語の意志を否定するのが普通だろう。これに対して3人称の場合には、やはり3人称の主語の意志の否定を話し手が判断して述べるような言語と、3人称の行為が現在の時点で行われ

(てい) ないことをただ客観的に淡々と述べる言語があるのかもしれない。同じ言語でも前後の文脈によってニュアンスが変わってくることも考えられる。モンゴル語のデータでは、「全く来ない」という意味が出る表現についても記述されている。このような問題については、今後さらなる研究が必要だろう。

・(5) [近未来] 「～さん(固有名詞)は/あの人は もう(すぐ)来る。」

子供の発話などを聞いていても感じられるが、もっとも頻度が高い動詞の形式は、話し手の意志を示す直近の未来の動作ではないだろうか。とすればもっとも無標な動詞形が、それを示してもおかしくないだろう(動作動詞の場合に)。実際に多くの言語が単なる現在形で近未来の動作を示すようだ。しかし単なる現在形では、たとえ近未来であっても未来を示せない言語も存在しているようだ。まず次にあげる3言語では、単なる現在形による表現はあがっていない。

インドネシア語では助動詞 *akan* を用いている。ちなみに(同音の別形式と見るべきなのかもしれないが)、*akan* には目的語明示の機能もあるという。トルコ語ではともに屈折形式である未来形もしくは超越形で表現する。ビルマ語では局面変化の助動詞を用いるか、「Vする時が近い;まもなくVする」のような迂言的な表現を用いるという。

他の言語では基本的に現在形による表現があがっているが、他の表現も同時に記されているものがある。フランス語では助動詞 *aller* 「行く」による表現、キルギス語では補助動詞 *kal* 「残る」による表現があがっている。ウルドゥー語では現在形の他に、現在進行形による表現と不定詞による表現があがっている。

フランス語やドイツ語、ペルシャ語などでは現在形が現在進行の意味も表すので、まぎらわしさが生じそうであるが、「もうすぐ」の意の時の副詞の助けによって、近未来の意味が確定するのだろう。ペルシャ語において、現在進行形で近未来を表現するのは不思議な気もするが、これも副詞の力によって成立するのではないだろうか。なおドイツ語の(6)の説明部分では、ドイツ語の現在形は発話時直前の過去も示せることが記されている。

ドイツ語ではさらに(2)でみた「ここにいる」のような表現も近未来に使えるようだが、これも副詞の助けによって成立するもののようなものである。

バルト・スラブ諸語では、このような近未来の事態に、完結相を用いるのか、不完結相を用いるのか、という問題が生ずる。事態の開始時点に注目するように思われるので、完結相の出現が予想される。ところが、ロシア語とウクライナ語ではもっぱら完結相で表現されているものの、ブルガリア語とラトヴィア語では両方の相の表現が

あがっている。

興味深いのは中国語とタイ語で、互いによく似た音の形式が文末に現れる。中国語の要素「了₂」は、完了を示す同音の別形態素「了₁」とは異なり、あくまでも「別の状況に変化した」ことを示すモーダルな要素として説明される。他方、タイ語の *lɛw* は「完了」として捉えられている。以下では、この2つの言語において、「了₁」・「了₂」、および *lɛw* の現れに注目し、対照してゆくことにする。

なお最後に近未来を示す時の副詞について触れておきたい。日本語でも「もう」は、「もう来た」とも「もう来る」とも言えるように、過去にも未来にも用いることができる。ナーナイ語の *aləə* も同様であるが、スペイン語の *ya* という語も例文を見る限りでは両方に使用可能なようだ。

・(6) [発見]「(あっ,) ~さんが来た。」

これもまさに今起きている出来事であるので、基本的に現在形で表現する言語が多いようだ。しかしいわゆる日本語の「発見の夕」のように、この状況で過去形が使える言語が存在する。まずペルシア語では過去形のみがあがっている。ロシア語には、(まれではあるが)「発見の過去形」も使えるという。

この2言語以外で過去形を使うのは中央・東アジアの言語であることが注目される。

トルコ語とモンゴル語の記述は似ており、進行形と過去形の両方が可能であるという。こちらに向かっている動きに注目するかどうかで表現は変わってくるようだ。

朝鮮語とラオ語では、「来る」ことを予想していたか、予想していなかったか、によって表現が違ってくるのが指摘されており、興味深い。いずれの言語も予想していなかった場合に過去形／完了形を使う。つまりは、予想の実現としての「完了」とみることができる。考えてみると、日本語でも、《バスを待っていた場合》には「バスが来た。」と言うが、その道にバス路線があることを全く知らなかった場合、つまり来ることを予想していなかった場合には、「あれ、バスが来た。」とともに、「あれ、バスが来るよ。」とも言えるように思う。

キルギス語・ウズベク語の場合には、2つの表現があがっているが、どちらも一種の過去形(キルギス：確定過去 vs 不定過去, ウズベク：単純過去 vs 伝聞過去)である。キルギス語では、どちらの表現にも「驚き」、「後で気づいた予想外の過去」との記述があるが、ウズベク語では伝聞過去のほうがはっきりと予想外の場合であると記述されている。

中国語では、(5)に続きここでも *了₂* が用いられる。これについては、状況の変化による説明と共に、「気づき」すなわち、「話し手の認知環境の更新」からも説明がなさ

れている。

筆者は、上記のように過去形／完了形を使う言語に関する統一的な説明として、次のようなものを提示したい。すなわち、どのケースもできごと自体の実現よりも、それに対する認識のほうが時間的に遅れ、認識の「完了」や予想の実現（の「完了」）として過去形／完了形を用いているのではないか、ということである（中国語に対しては、カッコつきでも「完了」というのは適当でないかもしれないが）。さらに言えば、これは自体の認識に関する問題であり、証拠性 (evidentiality) の問題と深くかかわっているものと考えられる。

ビルマ語にはその認識を示す専用 (?) の標示があるようで、「動詞文標識 -pi は動作の開始時点に言及する.」、「会話参加者以外の行為の場合は「V しているのに話し手が気づいた」という意味になる。」との記述がある。

最初に述べたように、多くの言語では現在形を使用し、バルト・スラブの諸言語もまた然りである。では、そこでは完結相が用いられるのか、それとも不完結相が用いられるのか。結果は、ブルガリア語、ウクライナ語では不完結相、ポーランド語では完結相、ロシア語、ラトヴィア語では両方とも可であった。ポーランド語では、「ただし気づいた場面」との注記があるので、これは認識の時点を点的にとらえたものとみることができる。ラトヴィア語では、近づいて来る動作プロセスと到着の瞬間のいずれに注目するかによって使い分けられるとの説明がある。

・(7) [現在と切り離された過去]「おととい、～さんが来たよ。」

(1) (パーフェクト) との対比の必要性から、現在と切り離された過去の用例を得るために設けた設問である。したがって、その言語におけるもっとも default で単純な過去形が現れることが期待された。

実際に単なる過去形による表現のみが使われていたのは、ペルシャ語、トルコ語、スペイン語 (点過去) であった。ドイツ語、フランス語では現在完了で示される。これらの言語における「過去形」は、すでに衰退し主に書き言葉に残るのみとなり、現在完了が広く過去を示すようになってきていることは広く知られている。(1)のドイツ語で、「ここにいる」のような現在の状態の表現が使われるのも、現在完了形が (現在と切り離された) 過去の表現の方へとずれて行ってしまったために、パーフェクトの意味を担う表現として、これを補うために現在の状態からずれ込んできたとみることができるかもしれない。

現在から切り離された過去を明示するために、むしろ特別な形式を用いる言語もある。朝鮮語では過去形を二重に用いたいわゆる大過去形によってこれを示す。日本の

東北方言にも、形の構成・機能の両面でよく似た「いたった」のような形式がある。ウルドゥー語では過去完了を用いる。なおウズベク語をはじめ、パーフェクトのほうにより有標な形式を持つものに関しては、(1)の分析のところで述べた。

アスペクトの問題とは直接関係がないが、ウルドゥー語において、単に動詞を過去形にただけでは文が終わった感じがなく、後に何か続く感じがする、という点が興味深い。中国語でも了₁では文が終わらないケースがあるという。ウルドゥー語の他の文がもっぱら（動詞文であっても）コンピュータで終わっていることからみて、この言語では文末に何らかの判断のモダリティーの形式を必要とすることが考えられる。

孤立型の言語、ラオ語では過去形もなく、テンスというカテゴリーもなく、動詞はもっとも単純な形で現れる。同じ孤立型言語でも中国語の場合は、了₂が現れるが、これも説明にあるように状況の変化を示すものであって、テンスでもアスペクトでもないという。やはり語形変化の少ないインドネシア語でも動詞は単純な形で、テンスというカテゴリーがない。ビルマ語も、少なくとも口語ではテンスがないようだ。

ビルマ語では、「行く」という動詞を補助動詞的に使い、「来て帰った」のような表現にすることで、現在と切り離された過去にすることができる。ただしこれはこのような意味の動詞に限って起こることであろう。ビルマ語の表現は分析的だが、ナーナイ語では *pulsi* 「行き来する」という意の動詞を用いることによって、(ビルマ語と同じように) 語彙的な要素によってこの意図を表現する形になっている。ロシア語などの(運動の動詞の)不定動詞も同様に機能しているものと考えられよう。

バルト・スラブ諸語の(狭義の)アスペクトに目をやると、ブルガリア語、ラトヴィア語、ポーランド語では完結相、ウクライナ語では不完結相となっている。切り離された過去を意図した例文であったが、ロシア語では結果状態の残存(すなわちパーフェクト)であれば、その意味を完結相過去によって示すと記述されている。

・(8) [切り離された過去(否定)] 「おととい、～さんは来なかったよ。」

(7)の否定文であり、単に(7)の動詞形の否定で表現されることが期待される。実際のどの言語でも(7)の動詞形の否定の文が用いられている。モンゴル語のみ、先にあげられた文の否定形で(7)の動詞の形式と対応しない形が現れている((3)も参照されたい)。

肯定の(7)とは異なり、朝鮮語で大過去のほうの否定形は用いられず、(7)にみられたその対立は否定では(3)と中和する。モンゴル語でも中和する。

モンゴル語とキルギス語では、「(来ると)期待していたのに来なかった」という《期待の非実現》を積極的に示す表現のあることが注目される。

興味深いのはインドネシア語で、過去の事実の否定とパーフェクトの否定では異な

る否定の副詞を用いる (tidak と belum). (1)で述べたように、この言語では動詞の変化が少ない分、副詞が大きな働きをしているようだ。日本語でも「夕」には過去と完了の2つの働きがあり、それは否定の時に違いをはっきりとあらわすということが言われている(肯定での「その映画を見た」に対して、否定には「その映画は見なかった」と「その映画はまだ見ていない」との対立がある)。

中国語・ラオ語では、インドネシア語のような違いはないものの、否定に2種類の使い分けがあることをすでにみた。この場合、どちらの言語でも発生の否定の形が用いられる。

なお(8) [否定]におけるバルト・スラブ諸語の完結相／不完結相は、(7) [肯定]での現われと全く対応している。

・(9) [他動詞のパーフェクト]「(私は) あのリングをもう食べた。」

(1)(2)と同様、パーフェクトの文だが、今度は他動詞である。他動詞の完了や過去では能格構文が現れる言語があり、自他の違いが重要なので、他動詞のほうでも調査した。今回調査した言語の中では、能格構文があらわれるのはウルドゥー語のみである。ウルドゥー語では動詞に主語の人称も表示するが、ここでもきちんと目的語のほうに動詞の人称が一致している点も興味深い。いわゆる統語的能格のあらわれである。このような言語は、ヒンディー語の西方言に始まり、西へ向かってコーカサスへと続いている。この項目のウルドゥー語の説明によれば、単に現在完了で表現した場合、リングは特定のリングとして解釈されるという。他動詞の場合、主語は主題とも解釈されることが多いだろうから、それを default とすると、(冠詞のない言語では)これに対して定の目的語の目的語のほうを主題とする場合に何らかの表現方法を用意しなければならないだろう。また他動詞の行為の結果は、行為者ではなく対象物のほうに残存することも多いだろう。このようなことから、アスペクトが格標示に影響を与えるということが生ずるものと考えられる。

興味深いことに、異なった構文を惹き起こす条件に関して、全くよく似た記述が、中国語の(9)における記述にも見られる。すなわち、目的語が定であって、「了」がある完了の文脈では、より無標の svo 構文ではなく、「把」構文が用いられる。

なお今回の対象言語のうち、チュルク系の言語とペルシャ語、モンゴル語でも、定の目的語の場合にのみ明示的に対格が用いられるという現象が観察される(ただしこれらの言語ではアスペクトの違いは直接関係していない)。

ウルドゥー語の場合、《行為者への影響》を明確にするために、「取る」という意味の動詞を用いるという。キルギス語でもやはり「取る」という意味の補助動詞を用い

るという。ただしこちらはリンゴを丸ごと全部、つまり残さず食べたことを示す、とあるので、両者の機能は異なっているとみるべきものかもしれない。

ウズベク語では食べ終わってからの時間の経過の多寡によって、2つの過去形を使い分ける、という記述も興味深い。

ドイツ語やフランス語では(1)や(2)の自動詞文と同様、現在完了の文があがっているが、ドイツ語では過去形の文もあがっている。schon「もう」との組み合わせでは、過去は現在完了よりも限定された点的な時間（ここでは開始時点）を示すという指摘も興味深い。

バルト・スラブ諸語ではどの言語でも単なる完結相のみが用いられている。ブルガリア語やラトヴィア語では、自動詞文の(2)でみられたパーフェクトの意味を強く示す現在完了形が、他動詞文の場合には用いられていない。

・(10) [他動詞のパーフェクトの否定] 「私はあのリンゴをまだ 食べていない／食べない。」

(10)は(9)の否定であり、基本的に動詞の形は(9)とよく対応する。「食べていない」と「食べない」の2つの形をあげたが、(3),(4)とは異なり主語が1人称なので、「食べない」のほうの主体の否定的意志が(3),(4)よりも明確である。

まずラオ語、トルコ語、モンゴル語ではこの違いが形の上に明確にあらわれている。ラオ語では既述の dáy「得る」の使用／不使用、トルコ語では過去否定形／未来否定形で表現し分けている。キルギス語とウズベク語ではこうした違いは記述されていないが、どちらも通常の語幹拡張接辞 -ba, -ma による否定形以外の表現があがっているので、意志的な否定形は別にある可能性も考えられる。

中国語では、hái「まだ」があるためか、不 bù による意志の否定は（コンテキストを設定するのが困難であるという理由で）不自然であって、想 xiǎng「～したい」による別の表現を用いるという。

ドイツ語、フランス語、スペイン語では、現在完了の否定も、現在形の否定の表現も共に可能であるが、ウルドゥー語では現在形の否定を用いた表現は不可能であるという。

バルト・スラブ諸語における完結相／不完結相についてみると、このようなケースでは基本的にどの言語でも不完結相になるようだ。ロシア語、ウクライナ語、ブルガリア語で不完結相であり、これらの言語では will にあたる助動詞を使った意志の否定も不完結相によるという。不完結相は一般的事実を示すという。

ラトヴィア語でも一般的事実では不完結相だが、食べきっていない、という意では

完結相が用いられるという。ポーランド語にみられる区別もこれに近い区別であるように思われる。

・(11) [現在進行]「あの人は今(ちょうど)そのリンゴを食べています／食べているところです。」

英語や日本語には(現在)進行形があるので、たいていの言語は進行形があるような気がしてしまう。しかし、ドイツ語、フランス語などを学んでみると現在形で進行を示しており、進行形、というものがそれほど一般的でないことを知る(古代日本語もそうであったという)。では世界の他の言語ではどのようになっているのだろうか？

ヨーロッパの言語で、英語のようにbe動詞+現在分詞による進行専用の形を持つのはスペイン語だけであった。ただ英語に比べ、スペイン語ではbe動詞に2種類あり、そのうちの一時的なアスペクトを示すほうのコピュラによって特定の時空間での進行状態を示していることに注意する必要がある。上述のようにフランス語、ドイツ語、ロシア語などでは基本的に現在形なので、時の副詞の存在が重要な働きを示している。進行を明示したい時に、ドイツ語、フランス語ではさらに前置詞(句)+不定詞による分析的な表現も用意しているという。

朝鮮語とモンゴル語はもっとも日本語に似ており、一定の接続形をとった動詞に存在の補助動詞を後続させている。接続形に2種類あって、その違いによって進行と結果継続を表現し分ける点では、西日本方言での「シヨル」、「シトル」の対立によく似ている。ビルマ語では例によって接続形をとらないが、やはり「いる、とどまる」の意の補助動詞を用いる。ウルドゥー語でも補助動詞「・・であり続ける」を用いている。ラオ語では動詞の前後に要素を用いる(ただし片方でも可)が、後ろの要素はやはり存在を示す動詞である。中国語でも存在の動詞「在 zài」が使われる。これに伴って多く用いられる「正 zhèng」は前後の事象との時間的前後関係を示す、いわばタクシ的に機能するものと説明されていて、興味深い。したがって、東アジアの言語の多くでは進行を示すのに存在動詞の文法化したものを用いているということになる。そして本動詞としての存在動詞との意味的連続性を保っている。他方ヨーロッパの言語におけるbe動詞もおおもとは存在動詞であるが、共時的にはもはやほとんど連続性がない。

チュルク系の言語では、存在動詞以外の動詞が文法化している。共時的なつながりはなく、もはや1語化しているが、トルコ語の進行の形は「歩く、進む」という意の動詞に由来するという。キルギス語では「横たわる」、「座る」、「動く」、「立つ」などの意の補助動詞が、接続する動詞によって使い分けられるという。ウズベク語では「横た

わる」で、これは一語化している。ただしキルギス語とウズベク語では接続の副動詞も異なっている点に注意したい。ペルシャでの助動詞は「持つ」である。インドネシア語の助動詞 sedang は「中間」にあたる語に由来するようだ。

他方、東アジアの言語の中にも、ナーナイ語のように補助動詞を持たない言語がある。また補助動詞の文法化があまり進んでいないことからみて、この地域でのこうした文法要素はわりと後になってから発達してきたという可能性も十分に考えられる。

・(12) [対象物を主語とした結果状態]「窓が開いている。／窓が開いていた。」

日本語共通語では進行と同形であるが、このような言語はあまり多くないようだ。

まず、そもそも動詞を用いず、別の品詞、もしくは動詞から別の品詞に派生させた要素を用いる言語がある。つまり文法的というより、語彙的な方法である。形容詞を用いる言語には、ドイツ語、モンゴル語、トルコ語、キルギス語、ウズベク語、ナーナイ語、ペルシャ語があり、副詞を用いる言語にはドイツ語、ラトヴィア語がある。

次に、統語的には形容詞に近いが、生産的に形成できる分詞を用い、受動表現によって問題の文を表わす言語に、ドイツ語、フランス語、スペイン語がある。完結相からの受動分詞過去形によるバルト・スラブ諸語も基本的に同様のやり方によっているといえる。日本語ではヴォイス的な転換を自他对立という語彙的な方法により語幹で処理してしまうが、上記のようなヨーロッパの言語は分詞形成の時点において、このようなヴォイス転換を文法的に処理しなければならないことがわかる。

インドネシア語における接頭辞 ter- の働きは興味深く、これは一種の逆使役（動作主消去）とみるべきものであろう。

日本語にもっとも似ているのはやはり朝鮮語で、(11)で述べたように、「シトル」のような構造によっている。ラオ語でも存在動詞を用いるという。

以上にみてきたような言語とは大きく違い、頻度が高く文法的な性格の強い状態の持続専用の形式を持っているのが中国語で、その形式は「着 zhe」である。

行為者の存在が強く意識される「開けてある」のような表現に当たるものの報告もあった。朝鮮語には「置く」に2種類あって、それぞれがともに「～ておく」のように補助動詞的に用いられるという。そのうちの「準備・もくろみ」の感じられない{-e noh-}によって「開けてある」のような意の表現が形成されるという。主語が明示される点で「開けてある」とは異なるが、スペイン語では「持つ」という動詞によって表現される。トルコでは放置を意味する動詞により、キルギス語では[受身+補助動詞「立つ」]によって表現されるという。モンゴル語では[他動詞+(確認を示す)存在動詞]によって表現されるという。

・(13) [習慣] 「私は毎朝新聞を読む／読んでいる。」

習慣は、はたして不完結相の下位区分としてよいものだろうか？ 進行や結果状態などの継続相との関係はどうなっているだろうか？

まずバルト・スラブ諸語にあっては、基本的に不完結相の現在で示される。

進行形を持たないドイツ語、フランス語、インドネシア語、ナーナイ語では、現在形が用いられ、時の副詞によって主にその意味が実現している。

進行形を持っていて、それを使う言語には、スペイン語、日本語、朝鮮語、ラオ語、ウズベク語がある。ただしどの言語でも現在形も使用可能である。キルギス語では、補助動詞に「動く」と「横たわる」の使い分けがあって、それぞれ、《長い習慣》と《最近の習慣》に対して使い分けられている。スペイン語でも現在形と進行形の使い分けがみられるが、それぞれ《主語の属性》と《特定期間内の習慣》に使い分けられているという。

他方、ビルマ語では進行形が使えないという。ただし短期間の習慣なら、副詞等の助けを借りて成立するという。

注目すべき言語に、習慣専用の形式を持つモンゴル語があげられる。ただし進行形も用いることができるという。ビルマ語にももっぱら習慣を示すのに文法化した要素が存在するようだ。トルコ語のいわゆる「中立形」も、習慣を示すのを中心的な働きとした形式としてみることができるだろう。この言語でも進行形を用いることができる。これと対比すると、中立形のほうは、主語の特質を示すものであるという。ウルドゥー語における{完了分詞+karnaa「する」}も習慣に特化した形式のようである。ただし現在形も用いられるという。

以上のような言語とはかなり異なるものとして中国語をあげることができる。この言語ではアスペクトに関して全く何の表示もなければ(つまりほうっておけば)、基本的に特定の時間や場所に位置づけられない行為や状態、いわば非アクチュアルな行為や状態を示す(習慣も含む)。逆に言えば、この言語では、具体的な時間や場所に行為や状態を位置づけるためには、何らかの標示を伴わなければならない。これは中国語が主題卓越型の言語であることとも大きく関連しているものと思われる。

・(14) [開始時点の不明瞭な状態] 「あなたは(あなたの)お母さんに似ている。」

この文のアスペクト的意味は、単なる状態というのに近いものである。しかし、生まれた時にせよ顔立ちがはっきりしてきた時にせよ、「似てきた開始の瞬間」があるとすれば、その後の結果状態と捉えることもできる。実際に具体的な言語のデータを見

てみると、形容詞や現在形によって《静的に》表現するものと、進行形を含むパーフェクト的な形式によって《動的に》表現するものの2つに大きく分けることができそうである。

まず状態としてこれを捉え、形容詞を用いるものには、ロシア語、ウクライナ語、ポーランド語、モンゴル語、キルギス語がある。ドイツ語やスペイン語では形容詞による表現とともに動詞による表現もある。スペイン語の場合、先述の2つのコピュラのうち、属性を示すほうのコピュラを用いる。ペルシャ語も、{名詞＋「持つ」}のような構造なので、これに準じたものと考えられる。

現在形を用いる言語には、ドイツ語、フランス語、ウズベク語、スペイン語がある。ブルガリア語では不完結相の現在による。孤立語では品詞が明確でない面があると思われるが、ラオ語もここに入るといってよいだろう。ビルマ語も進行形は不可で現在形による。しかし「良く見たら／意外にも」のような意味では進行形も用いることができるという。

以下ではパーフェクト的な表現をとる言語をみる。

日本語のように現在進行を示すのにも使われる形が使えるのはトルコ語のみである。ラトヴィア語では{be 動詞の現在＋不完結相の動詞の過去分詞}によるという。ウズベク語は、分析的な表現である未完了過去を使うという。この項目に関しては、バルト・スラブ諸語にしても、チュルク諸語にしても（語族内部において）言語によって表現がバラバラであることが注目される。

朝鮮語で過去形が用いられる点が注目される。(1)(2)でもみたように、この言語の過去形はその歴史的来源から、パーフェクト的な性格を強く残している。「結婚している」に関する表現でも同様で、単独主体の一回性動作では、過去形が用いられるという。

「結婚している」に関してはインドネシア語でも完了の助動詞が使用可能であるという。ウルドゥー語では、「似ている」は「会う」と「合わさる」という意味の動詞を続けることによって迂言的に表現されているが、動詞の文法的な形は習慣や結果継続と同じほうの構成になっている。ナーナイ語では「生まれついた」のような表現になっているが、これも1種のパーフェクト的な表現とみることができよう。

中国語では(13)で述べたように、このような非アクチュアルなアスペクト的意味に対しては無表示となる。

- ・(15) [過去の習慣] 「私はその頃毎日学校へ通っていた。」

ここでは単なる過去形による言語、不完結相による言語、習慣専用の形式を用いる言語、さらには過去の習慣に専用の形式を用いる言語がみられる。

ドイツ語、フランス語では（もはや過去形的に機能している）現在完了形を使う。ドイツ語では本来の過去形も使える。ラトヴィア語、ナーナイ語では過去形を使う。朝鮮語では過去形や大過去形が用いられ、日本語とは異なった表現となっている。

ロシア語、ブルガリア語、ウクライナ語、ポーランド語では不完結相を使う。ウズベク語では(14)でも現れた分析的な未完了過去の形を使う。ペルシャ語も未完了過去形による。

モンゴル語やトルコ語、ウルドゥー語では、現在の習慣である(13)の文で現れた習慣に特化した形式を過去形にして用いる。ビルマ語における習慣の形式は短期間の場合のみ用いられるとあり、(13)での記述と一致している。

英語の *used to* のように過去の習慣に特化した形式を持つ言語もわずかながら存在するようだ。キルギス語にはその名も習慣過去という形があり、これは(12)でも現れている。その機能に関する説明をみる限りパーフェクト的な性格を強く持っているようだ。インドネシア語にもあるようだが、その使用には一定の制限があるようだ。

日本語には「～したものだ」のような迂言的な形式があるが、朝鮮語にはこれに対応したような形式があるという。スペイン語にも「～するのが常である」のような分析的表現があるようだが、どの程度の頻度で用いられるものだろうか。

中国語ではやはりこうした非アクチュアルなケースでは、明示的な形式が現れない。ラオ語も時を示す副詞以外に特に明示的な要素がない。

なお 18 世紀のロシア語には「遠い昔に行われた多回体の動作」を示す形式があった、という記述が興味深い。

日本語のように、現在進行を中心的な機能とする形式が、過去の習慣を示すのにも用いられるような言語はどうも見当たらないようである。

・(16) [経験] 「私は～に（大きな街の名前など）行ったことがある。」

いわゆる経験を示す用法である。英語の現在完了に経験用法があるように、経験は現在の状況に影響を与えるパーフェクト的な面を持っている。

スペイン語、ウルドゥー語、ペルシャ語で現在完了が現れるのはこうしたシステムによるものと考えられる。キルギス語の不明過去も結果継続や経験の機能を持つとあるので、同様にして説明できるだろう。ウズベク語の歴史的過去もキルギス語の形式と同源である。フランス語では、一般動詞の現在完了とともに、*be* 動詞を現在完了にした表現があがっている。*be* 動詞の現在完了はブルガリア語、ラトヴィア語にもみられる。

ロシア語、ウクライナ語、ドイツ語では、*be* 動詞の過去形により、状態的な存在と

して表現される。ロシア語、ウクライナ語でその過去形が不完結相をとるのは、現在と切り離すためであるという。完結相過去は「今もいる」というパーフェクト的な意味を実現してしまうからであろう。しかしポーランド語では完結相で表現されるという。

他方、ナーナイ語では単なる過去形で示される。トルコ語でも文脈の助けがあれば、単なる過去形で表現されるという。

モンゴル語では日本語のように進行の形式が使われるが、時制は過去である。

以下の言語は経験を示す専用の形式を持つ。朝鮮語やトルコ語では、「行ったことがある」にあたるような分析的な形式が使われる。インドネシア語やラオ語、ビルマ語では、助動詞が用いられている。中国語にも経験に特化したアスペクト・マーカがある。このようにみえてくると、東アジア、東南アジアの言語には経験に特化した形式がよく用意されているということがわかる。

・(17) [起動相]「やっとなバスは 走り出した／走り始めた。」

まず単に「動く」のような動詞を使うことで、語彙的によってのみ表現する言語（キルギス語）がある。接頭辞による派生、すなわちいわゆるアクツィオンスアルトによる言語にドイツ語がある。ラトヴィア語でも一部の動詞にそのようなやり方がみられるという。項目の説明に記述されているわけではないが、筆者の知る限りロシアでも接頭辞 *za-* による派生がある。

アジアの言語では珍しく、ナーナイ語では動詞の文法的な派生接辞（語幹拡張接辞）によって、起動相が示される。

スラブ系の言語ではこのような場合には完結相が用いられる（ロシア語、ブルガリア語、ウクライナ語、ポーランド語）。

他方、「始める」の意味の局相（位相）動詞を用いる言語も多く存在する。動詞を名詞的な形に直してから局相動詞に接続する言語が多いようだ。ラトヴィア語、ポーランド語では不定詞にして接続する。スペイン語では不定詞がさらに前置詞を伴う。朝鮮語では接辞により名詞化する。トルコ語では動名詞に与格を伴う。

名詞的な形にせず、副動詞による言語には、モンゴル語、キルギス語、ウズベク語のようなアルタイ型言語がみられる。

ラオ語や中国語のような孤立型の言語では動詞連続によって表現されている。

局相動詞「始める」以外の要素による言語もある。インドネシア語の助動詞は、「新しい」の意の形容詞が文法化したものであるという。フランス語やスペイン語では“*put*”の意の動詞を再帰的に用いて迂言的な表現を形成している。ウルドゥー語でも、

「付く」の意の動詞を用いるという。

中国語やラオ語では、状況の変化と捉えられた場合に、やはり了₂および lɛɛw が現れている。

・(18) [長時間継続]「きのう彼女はずっと寝ていた。」

まず、単に過去の出来事として表現するのみであって、長時間継続の意味の実現はもっぱら時の副詞に依存する言語（ドイツ語、フランス語、ラオ語、ナーナイ語）がある。バルト・スラブ諸語はどれも不完結相を用いている。スペイン語は意外にも点過去を用いるが、これに関しては、期間を示す副詞句があれば、それが特定されない期間でも点過去を用いるとの記述がされている。

ラトヴィア語には、長時間継続を示す派生的な動詞形（つまりアクツィオンスアルト）があるが、これはそのことに対する話者の否定的態度を示すという。

日本語のように、現在進行に特化した形式を持っていて、これの過去形を使う言語には、朝鮮語、ウルドゥー語、トルコ語、スペイン語、中国語、ビルマ語がある。ただし朝鮮語の場合は日本語と異なり、単なる過去形でも表現できるという。キルギス語とウズベク語はともに「寝る」という動詞だからか、「横たわる」という補助動詞を使う。ウズベク語のこの項目には、動作の様態によって、補助動詞の使い分けがあることが記されていて興味深い。

モンゴル語の -aad bai- は、結果継続も示すが、このような長時間継続に特化した形であることが注目される。ペルシャ語の形も、少なくとも進行とは別の形式であるようだ。筆者の知る限りでは、ツングース諸語の中のエウエン語に、このような長時間継続専用の語幹拡張接辞（文法的派生接辞）がある。

・(19) [(軽度の) 試行]「私はそれをちょっと食べてみた。」

まずペルシャ語では単に「ちょっと」などの意の副詞のみによって表現している。フランス語では「～のうちの少し」のような名詞による表現で表現している。

語彙的に「試食する・味見する」の意の動詞を用いる言語は多く、ドイツ語、ラトヴィア語、ロシア語、ブルガリア語、ウクライナ語、ポーランド語、スペイン語、ナーナイ語がこれにあたる。トルコ語では「味を見る」のように分析的な表現をとっているものの、やはり語彙的な方法によっている。

これに対し、より文法的な方法によっているものをみていく。ドイツ語では前置詞 von を用いるが、これは部分格的な発想ということができただろう。ウズベク語でも「～から少し」のような表現で奪格が用いられている。

完結／不完結相の違いに注目すると、バルト・スラブ諸語はみな完結相の表現となっている。

トルコ語やインドネシア語では、「試す」の意味の動詞を助動詞的に使うことができる。スペイン語での助動詞「試す」は前置詞を介して不定詞をとる。ラオ語では本来「試す」と「見る」の意の動詞を動詞句の前後に配置するという。

アジアの言語には、日本語のように「見る」の意の動詞を補助動詞的に用いることのできるものが多いようだ。朝鮮語の補助動詞 *po-* 「見る」は経験も示せるという。日本語の補助動詞「～てみる」よりも意味範囲が広く使用頻度も高いようだ。さらに「見る」の意の補助動詞を用いる言語に、モンゴル語、ウルドゥー語、キルギス語、ウズベク語、ビルマ語がある。中国語も動詞の重複の後ろにさらに「看 *kàn*」(見る)を伴うことがあるという。

中国語では、重複によって軽度の動作を示すことが興味深い。

なおこのケースでは、中国語において了₁が用いられており、ラオ語でもやはり *lêw* が現れている。

- ・(20)[多方向への客体的分配]「あの人はそれ(ら)をみんなに分け与えた。」

「分配する」のような動詞によって、すなわち、もっぱら動詞の語彙的な意味によってこれを表現しているような言語に、ドイツ語、フランス語、トルコ語、ペルシャ語がある。

スラブ系の4つの言語では、いずれの言語も接頭辞によるアクティオンスアルト的な動詞の派生が可能である(ロシア語の *raz-* など、動作の他方向性を示す)。また4言語とも完結相による表現となっている。

「分ける」＋「与える」のような構成の表現になっているものに、朝鮮語、モンゴル語、キルギス語、ウズベク語、ビルマ語がある。ウルドゥー語の「与える」の意の補助動詞は、行為の影響が被行為者へ及ぶニュアンスを付加するという。いわば充当(*applicative*)のヴォイス的機能を持っているようだ。

インドネシア語では、動作の繰り返しに重複を用いるが、対象の複数性が明らかでない場合には使わないという。つまり義務的な手法ではないということだ。インドネシア語にはさらに(一部の他動詞につき)繰り返しを示す専用の接尾辞 *-i* があるという。

ナーナイ語には、多対象や多方向への動作を示す語幹拡張の派生接辞 *-kta-*がある点が目される。

- ・(21) [近未来の勧誘]「さあ、(私たちは)行くよ！」

このアンケート項目では、このような差し迫った未来の動作に用いられる過去形、もしくはそれに類する形を問題にする。

まずドイツ語では、特定の状況での固定的表現においてのみ、過去分詞による表現があるという。

ロシア語、ウクライナ語では完結相過去によるが、ポーランド語では現在形による表現があがっている。ラトヴィア語における過去分詞による表現は、ロシア語の影響によって生じた可能性があり、「俗語的でせきたてるニュアンス」を持つという。ブルガリア語は関係節の中であるが（いわゆる da 構文）、不完結相が現れている。

モンゴル語では近未来のことを示すのに「近過去」の形を使う。トルコ語でも過去形が使えるが、これは差し迫った未来の動作を示すという。キルギス語、ウズベク語、ペルシャ語でも過去形が使えるという。

ラオ語では完了の ເຮັດ があると、「もう行かないと間に合わない」というような緊迫性の増した言い方になるという。他方、ここでは中国語においては了₁も了₂も現れていない。

日本語でも、「さあ、行った行った！」のような表現でタ形が用いられるが、これにも「せきたてるような」、「差し迫った」ニュアンスがあり、諸言語での報告と一致していて、興味深い。

・(22) [恒常的真理]「地球は太陽の周りを回っている。」

このような場合、バルト・スラブ諸語ではどの言語も不完結相で表現されている。

日本語と同じように、進行形を持ちそれをここでも使用できる言語は、朝鮮語、キルギス語である。ビルマ語は、先の項目でも記述があったように目の前のことのみには進行形が使えないという。

モンゴル語では、習慣を示す形式を用いる。トルコ語では、習慣等を示す中立形と、進行形の両方が使えるという。

この場合に、中国語では了₁/了₂が、ラオ語では ເຮັດ が用いられない。

・(23) [将然相]「あの木は今にも倒れそうだ。」

この項目の回答では、時の副詞の力が大きく働いているものが多いが、副詞に関しては特に取りあげず、動詞に関連する形式のみを問題にすることにする。

この表現に関しては、大雑把にみて、(近未来を示す)時間的な表現によってより客観的に表現している言語と、モダリティ的な形式によって主観的に表現している言語があることがわかる。

ドイツ語では、本来「脅かす」の意の補助動詞を用いる。フランス語およびキルギス語では「行く」の意の補助動詞を用いる。

完結／不完結相に関してみると、バルト・スラブ諸語はみな完結相によって示していることがわかる。

モンゴル語では、未来を示す形動詞＋小辞で、トルコでも動名詞に付属語を加えて表現する。ウルドゥー語は不定詞を含む分析的な表現を用いる。これらの言語は名詞的に機能する動詞形を用いて静的に表現しているといえるだろう。

しかし、「～な様子に見える」のような判断のモダリティーに近づいた表現もみられる。前置詞句＋不定詞など、「～に近い」のような表現をする言語に、フランス語、スペイン語がある。ペルシャ語もこの類の表現であるようだ。

ブルガリア語やラトヴィア語では、非人称動詞「～と見える」が関係節を伴って現れる。中国語ではやはり「看起來」（～のようだ）のような表現が現れる。ビルマ語では名詞「姿」を含む分析的な表現を用いる。

ウクライナ語では、英語の助動詞 may のような機能の助動詞を用いる。朝鮮語では判断のモダリティーの形式が現れる。キルギス語やウズベク語では、願望形を含む分析的な形式（「～ようとしている」）による。

中国語では快要～了₂のように了₂が現れ、ラオ語でも lèew が現れている。

・(24) [将然相－未遂]「(私は) 危うく転ぶところだった。」

この項目においても、言語によってさまざまな表現が用いられている。やはりより時間的な表現をとるものと、よりモダリティー的に表現するものがある。

フランス語、ラオ語においては補助動詞「危うく～する（ところだった）」によって表現される。未実現の事態であるにもかかわらず、スペイン語でも線過去ではなく現在形によって表現される。ラトヴィア語とポーランド語では、肯定の完結相によって表現される。

朝鮮語は日本語とよく似た構成の表現を用いる。キルギス語もこれに準ずるものと思われる。ペルシャ語では、「近い」の意の語を含む分析的な表現による。ウズベク語では、「～するに少し残った」のような表現である。トルコ語も「残る」という動詞を起源とした表現だが、もはや固定化して副詞相当語句となっているという。

ビルマ語では「生じる」を含む分析的な表現を用いる。ウルドゥー語では重複法を用い、「倒れ倒れ救われる」のように表現するという。

他方、実際には実現しなかった事態であるので、その反事実性を捉えた表現をする言語がある。ドイツ語では接続法第 II 式を用いる。「実現しない」ことであるため、

否定形が現れる言語がある。スラブ系の言語のうち、ロシア語、ウクライナ語、ブルガリア語では否定の形式が現れる。モンゴル語でも「運よく倒れてしまわなかった」のような表現になっている。中国語では望ましい事態に関する表現であるか、望ましくない事態に関する表現であるかによって、否定の現れ方が違ってくるといふ点が興味深い。

- ・(25) [準備]「明日お客が来るので、パンを買っておく。」

「(前もって)～ておく」のような、準備を示す動詞関連の形式があるかを問題にした項目である。

そのような表現を持たない言語は、ドイツ語、フランス語、ロシア語、ブルガリア語、ラトヴィア語、ポーランド語、トルコ語、ペルシャ語、中国語である。これらの言語では、接続詞をはじめとする要素が2つの節の関係を明確にし、そのことによつて上記のようなニュアンスは伝達されているようだ。

ウクライナ語とナーナイ語では「(～する) 必要がある」のような意の表現を用いている。

朝鮮語には日本語の「～ておく」にあたる表現が2種類あるという。「置く」という動詞が文法化した要素を用いる言語は意外にたくさんあった。ビルマ語、ラオ語、ウルドゥー語、キルギス語、ウズベク語がこれに該当する。

スペイン語では、本来「(放つて) おく」の意の動詞が過去分詞をとつて分析的な表現を形成する。

モンゴル語では完遂を示す語幹拡張接辞がこのニュアンスを実現するという。

- ・(26) 「(私は) ～に (街とか市場とか) 行った時、この袋を買った。」
 - ・(27) 「(私は) ～に (街とか市場とか) 行く時/行く前に、この袋を買った。」
- [絶対的テンスの言語における時制の一致/相対テンス]

ここでは、特に(27)の従属節に関して、主節が過去であるにもかかわらず現在形が現れるかどうか注目する。すると大雑把には、過去形が現れる言語、現在形が現れる言語、(不定詞など準動詞の形になり) テンスとは関係がなくなる言語、の3通りに分けられる。

過去形(過去として機能する現在完了形を含む)が現れる言語には、ドイツ語、ロシア語、ラトヴィア語、ポーランド語、スペイン語がある。進行形の過去形が現れる言語に、キルギス語とウズベク語がある。

現在形が現れる言語には、モンゴル語、ナーナイ語、トルコ語、キルギス語がある。ただこれらは形動詞や中立形と呼ばれる形で、名詞的にも機能するので、次のグループに入れるべきものかもしれない。ブルガリア語でも現在形だが、これも関係節の中のもので、不定詞の消滅を補って働いている da 構文における形である。

準動詞によるものには、不定詞を用いるフランス語、ロシア語、ウクライナ語、スペイン語、副動詞もしくは名詞化による朝鮮語、未完了分詞によるウルドゥー語がある。トルコ語では否定副動詞による「行かずに前もって」のような表現も使われるという。

少し変わったものに、接続法をとるペルシャ語がある。

孤立型の言語であり、テンスを持たない中国語やラオ語、ビルマ語における動詞はそのままの形である。ただしラオ語には未然を示す形式が現れている。

・(28) [時制の一致] 「(私は) 彼が市場でこの袋を買ったのを知っていた。」

時制の一致を問題にした項目である。ここでは、単なる過去形でなく、《主節の過去より以前のできごとであること》を明示する形式が現れるかどうか注目する。

まず時制の一致があると考えられるのは次のような言語である。フランス語では大過去が現れる。スペイン語でも過去完了が使われるが、単なる点過去が出ることも多いという。ウルドゥー語とペルシャ語では過去完了形が現れている。

中間的な言語らしきものにブルガリア語があり、そこでは過去完了も可だが、現在完了でも完結相過去でもよいという。ラトヴィア語もこれに近い状況のようだ。

一方、時制の一致がない言語には、ドイツ語、ロシア語、ウクライナ語、ポーランド語、モンゴル語がある。

トルコ語、キルギス語、ウズベク語、ナーナイ語では過去の形動詞が用いられているが、これは時制の一致によるものではなく、主節の示す時に対して先行した動作であることを示す相対時制であると考えたい。ただしこのことについては、なお今後の検討を要すると思われる。朝鮮語の連体形にはテンス的な区別があり、ここでは過去連体形が現れるが、これも日本語と同様相対テンスとして機能しているものと考えたい。

ビルマ語では名詞節化しているが、テンス・アスペクトに関連する明示的な形式は現れていない。

6. 今後の課題

以上、アンケートの各項目についての検討を行った。ここで、さらに全体のまとめ

と整理を行いたいが、筆者には残念ながら現在その時間と能力が不足している。データについても、アフリカや北米・中南米の言語、オーストラリア先住民の言語のデータが無く、類型論的なまとめを行うには時期尚早である面も認められる。

ここでは、以下に今後の課題をいくつかあげておくにとどめたい。

- ・最初に仮定した①－④の間の関係を、実際の言語での諸形式の現われから検討する必要がある。
- ・ある特別な機能に特化した形式が、どの言語に、どの程度あるか、についてよく整理する必要がある。
- ・アジアの言語とヨーロッパの言語で、表示の有無が大きく異なる項目がいくつかある。無論こうした二元論でなく、さらに上記のような他の地域を視野に入れて検討し直すべきであるが、その理由や起源について検討すべき問題であろう。
- ・時制の一致や相対テンスの問題に関しては、研究が遅れているようである。この問題を体系的に研究する必要がある。

末筆ながら、興味深く貴重なデータをお寄せくださった諸先生方に深く感謝申し上げます。アンケートの作成をはじめとするさまざまな場面で貴重なアドバイスを下さった語学研究所所員の諸先生に特にお礼申し述べたい。また、筆者の怠惰と体調管理のまずさから、この「まえがき」の執筆に予想以上の時間がかかってしまい、刊行の遅れにつながったことに対してお詫び申し上げます。

参考文献

- コムリー、バーナード 1988. 『アスペクト』、山田小枝訳、東京:むぎ書房。[Comrie, Bernard 1976. *Aspect*, Cambridge: Cambridge University Press.]
山田小枝 1988. 「訳者あとがき」(コムリー 1988 所収)

付録：アンケート

語研論集特集へのご協力をお願い

風間伸次郎，中澤英彦，鈴木玲子

語研論集の特集について、このほど、風間、中澤、鈴木の三者で相談し、以下のよう大枠で「アспект」に関する原稿作成あるいは言語データ提供をお願いすることになりました。

特集の趣旨は、自由な（したがって通常は相互に関連のない）投稿原稿ばかりではなく、「語研論集ならでは」というコンテンツを考えてみようということです。特集の個々の寄稿は論文でも研究ノートでも結構です。また、論文・研究ノートを書く余裕がないという場合には、下のようなアンケートに答える形で言語データ提供にご協力いただければと思います。アンケートについては、回答が重複してもいけませんので特集担当者として調整していただくこととなりますが、共通のテーマに関して、さまざまな言語における状況をまずは並べて見てみることから始めたいと考えています。

なおデータ提供の（第一次）締め切りは、11月末（11/30）とさせていただきます。

I. 以下のアンケートにご協力ください。

以下の例文に対応する内容は、その言語ではどのように表現されるか？ 「アспект」というテーマの性質から、必然的にテンスやアクツィオンスアルトにも関連した表現があがっています。

[] 内は、その例文を訊く狙い等のコメントです。なお、これらのアンケートの文（の意味内容）に対して、いくつかの動詞形（さらには別の品詞による形）が対応する場合、それも書いていただければありがたいです。もしその形式間に意味やニュアンスの違いがあるようでしたら、それについても解説いただけるとさいわいです。

(1) ~さん(固有名詞)は／あの方は もう来た。

[自動詞の不完結相。まだ~しない、もう~した、はもともと基本的な対立で、動詞における表示でテンスのない言語はあっても、この対立のない言語はない(!?)という]

(2) ~さん(固有名詞)は／あの人は もう来ている。

[上の(1)と同じ表現になる言語は、その旨のみ記していただければけっこうです。]

(3) ~さん(固有名詞)は／あの人は まだ来っていない。

[自動詞の完結相。主語が不要な言語では主語の部分は無くともよいです。移動動詞ではアスペクトの例文を得るのに不都合がある言語では、他の動詞でもよいです。「起きる」、「乗る」などの例文が考えられます(ただ「起きる」だと制御不能の動詞となる言語もあるでしょうし、「乗る」だと場所の名詞項が必要になるかもしれません)。(1)~(7)はなるべく同じ動詞で統一されていることが望ましいです。ただやむを得ない場合は、(1)~(4)と(5)~(7)が別の動詞になったりしてもかまいません。]

(4) ~さん(固有名詞)は／あの人は まだ来ない。

[上の(3)と同じ表現になる言語は、その旨のみ記していただければけっこうです。上の(3)とは意志性などに関して対立を示す言語の場合には、それについて教えて下さい。]

(5) ~さん(固有名詞)は／あの人は もう(すぐ)来る。

[中国語など、このようなケースで一種の完結相(モダリティかもしれないが)を使える言語がある。]

(6) (あつ、)~さんが来た。 [その人が来るのに気づいた場面での発話]

[いわゆる日本語学でいう「発見の夕」。このようなケースで「過去形」が使える言語は少なくともアジアにはいくつかある、できれば来ることを予想していた場合と予想していなかった場合の両方が聞けるとよい。]

(7) おととい、~さんが来たよ。

[(1)の例文と対比するのに、単純な過去形の例が必要なため。「起きる」などの動詞を使った場合には「さっき~さんは起きたよ」のように副詞等を若干変えてもかまいません。]

(8) おととい、~さんは来なかったよ。

[まだ来ていない, との対比. 否定を示す要素において, アスペクトの違いが現れる言語(中国語など)があるため. 日本語でも(1)との対比で問題となる文である.]

(9) (私は)あのリンゴをもう食べた.

[自動詞／他動詞の別で完結相／未完結相が異なってくる言語があるため. こちらは他動詞の例. 「リンゴ」の部分は別の名詞でもけっこうです. 不規則動詞である, とか文化的な理由がある, などの理由で「食べる」という動詞では例文が採りづらい言語の場合には, 「本を読む」などでもけっこうです. その際には, (10), (11)も同じ動詞で統一して下さい.]完了形などに限って能格型になる言語があります(ヒンディーなど). 行為者を明示することができない言語もあると思いますが, その場合行為者は無くてけっこうです.]

(10) 私はあのリンゴをまだ 食べていない／食べない.

[他動詞の未完結相の否定の場合です. スラッシュの前後で表現が変わってくる言語の場合は, それについても教えて下さい.]

(11) あの人は今(ちょうど)そのリンゴを食べています／食べているところです.

[進行形はあるか? 現在形と同じか? 基本的に単に現在形で示すが, もしさらに現在進行であることを明示する形式がある場合には, ぜひその例もあげてください. 日本語の「(～て) いる」のように補助動詞を使う場合にはその動詞の元の意味(単独で使った場合の意味)も教えて下さい.]

(12) 窓が開いている. /窓が開いていた.

[限界動詞による結果状態の継続. 進行形がある言語では, 進行形と同じか? 「窓が開けてある」のような, 行為者の存在を含意した構文がさらに別にあれば, それについてもぜひ記してください.]

(13) 私は毎朝新聞を読む／読んでいる.

[習慣を示すアスペクト的形式. もし新聞やそれを読むことが一般的でない言語や文化などの場合, 「散歩をする」とか「水汲みに行く」などでもよい.]

(14) あなたは(あなたの)お母さんに似ている.

[現在形や進行形が使えるか? 朝鮮語などでは過去形になる. この文では形容詞や

分詞、名詞による表現になってしまって、動詞のAspectに関する例文が得られない、という言語の場合、「彼女は結婚している」などの文でもよい。それでも動詞によるAspect的な形式が得られない言語の場合、その形容詞や分詞、名詞による表現を書いていただければありがたいです(その事実も貴重なので)。

(15) 私はその頃毎日学校へ通っていた。

[英語の used to のような形があるか。]

(16) 私は～に(大きな街の名前など)行ったことがある。

[経験について。進行形のある言語では、ここでそれが使えるかも訊きたい。]

(17) やっとバスは 走り出した／走り始めた。

[開始的なAspect表現。]

(18) きう彼女はずっと寝ていた。

[長時間の継続。]

(19) 私はそれをちょっと食べてみた。

[試行的なAspect表現。]

(20) あの人(ら)はそれ(ら)をみんなに分け与えた。

[多くの(間接)目的語に対する多回的なAspect表現。]

II. 論文・研究ノートをご執筆いただける場合は次の2点を可能な限りご考慮ください。

1. いわゆる「Aspect」を表すにはどのような(形態的、語彙的など)表現があり、それはどのような(形態的、語彙的、意味的な)表現をとるのか? 文法化されている場合には、どのようなParadigmをなしているか、形式と共にあげていただくとありがたいです。Tenseの体系、Paradigmについてもあげていただければありがたいです。Tenseのない言語の場合は、副詞等、Tenseを示す手段についても言及して下さい。

2. 「アスペクト」と他の（文法）カテゴリーとの関係はどのようになっているか。例えばアクツィオンスアールト、態（voice）などとの関係はどのようになっているかにご注意下さい。
3. 「アスペクト」に関して、その言語で定説とされているのはどのようなことか？ 代表的な先行研究にどのようなものがあるか？その内容は大筋どのようなことか？

（データ提供のみの方でも、論文・研究ノート執筆の方でも）さらに以下のような表現についても調査／研究していただけるとありがたいです。

- (21) さあ、(私たちは)行くよ！
[このような表現で、「過去形」を使う言語がある]
- (22) 地球は太陽の周りを回っている。
[いわゆる「恒常的な真理」の表現]
- (23) あの木は今にも倒れそうだ。
[いわゆる将然相]
- (24) (私は)あやうく転ぶところだった。
[未実現の事態]
- (25) 明日お客が来るので、パンを買っておく。
[準備。「～ておく」のような補助動詞、もしくはそれに相当するものがあるかどうか]
- (26) (私は)～に(街とか市場とか) 行った時、この袋を買った。
- (27) (私は)～に(街とか市場とか) 行く時／行く前に、この袋を買った。
- (28) (私は)彼が市場でこの袋を買ったのを知っていた。
[上記の3つの例文は時制の一致や相対テンスの有無を知るためのもの]